

平成 17 年度卒業論文

小説『マノリの回想録』から見るアナトリアのギリシャ系住民
— 労働者大隊 (Amele Taburu) と脱走兵を中心に —

南・西アジア課程トルコ語専攻
8501138 大内 順子

目次

はじめに	...3
第1章 20世紀初頭のトルコとギリシャ	...5
1. バルカン戦争から第一次世界大戦へ	
2. 小アジア戦争	
3. 1923年住民交換	
第2章 『マノリの回想録』について	...7
1. 著者	
2. あらすじ	
2-1 第1章 楽園の暮らし	
2-2 第2章 労働者大隊	
2-3 第3章 ギリシャの侵攻	
2-4 第4章 大惨事	
3. 資料としての『マノリの回想録』	
第3章 労働者大隊と脱走兵	...16
1. 労働者大隊	
1-1 労働者大隊	
1-2 労働の様子	
1-3 チフスの蔓延	
2. 脱走兵	
2-1 脱走兵	
2-2 脱走兵の家族	
2-3 ジャンダルマの取引	
2-4 トルコ人農民とギリシャ人	
2-5 マノリの脱走	
2-6 脱走兵に対する人々の反応	
おわりに	...31
文献目録	

はじめに

生まれ育った土地の記憶はいつまでも人の心に残り、時にそれは郷愁として甦る。ディド・ソティリユ（Dido Sotiriyu）はその想いを作家として執筆作品に綴った。彼女は 1923 年のトルコ・ギリシャ間における住民交換を経験したギリシャ人の 1 人である。トルコのアイドゥンで生まれ、強制移住によってその後アテネへ移住した。移住後も流入民としての辛い経験やドイツのファシストによる大虐殺、ドイツ占領時代に報道の仕事での活躍など波乱に満ちた人生を送ったが、生まれ育ったアナトリアへの郷愁は彼女の中で尽きることはなかった。そして執筆した小説が『マノリの回想録』¹である。この作品の冒頭で彼女はこう語っている。

アナトリアのギリシャ人が祖先の土地から離れて 40 年以上が過ぎた。
この波乱を経験したものは 1 人また 1 人と亡くなり、生きた形跡を失
いつつある。民衆の宝は消され、歴史文書館へと埋められている。ア
ナトリアのギリシャ系民族にあることわざがある。

「死人の目から涙はこぼれず。」

その時代を経験したものたちの記憶に私は取り組んだ。愛情を持って
彼らの感情に耳を傾けた。

〔中略〕

私はこの小説を真の目撃者の言葉から構成した。二度と戻らない失わ
れた世界を再現する目的でこの仕事をした。経験者たちは忘れないよ
う、そして若い世代はありのままを知って学んでほしい。(p5.)

著者自身がこう語っているように、この作品は小説ではあるが空想を基にした話ではなく、現実を描いた真実により近いものと考えられる。作品では主人公のギリシャ人、マノリ・アクシオティスが 1923 年の住民交換によりアナトリアを離れるまでが描かれている。本論ではこの小説を資料として、20 世紀初頭のアナトリアのギリシャ人の体験を考察したいと思う。特に 2 章で描かれている労働者大隊（Amele Taburu）と脱走兵の描写を中心に見ていきたい。

小説をもとに歴史を読み解くことは当然マイナスになる部分もあると思われる。読み物としてエンターテインメント性を高めるために多少の脚色が加えられている可能性は否めない。しかし前述しているように、『マノリの回想録』は事実を再現する目的で書かれたもの

¹ Dido Sotiriyu, *Matomena Homata*, Kedros, Atina, 1963.

Türkçe çevirisi: *Benden Selam Söyle Anadolu'ya*, Atilla Tokathı(tr.), İstanbul: Alan Yayıncılık, 1989(7th ver.), first published in 1970.

以下 Sotiriyu とする。本論では邦題『マノリの回想録』として扱い、引用文のページ数は本文中に挿入する。

でもあり、当時のギリシャ人の体験を知るうえで価値ある資料だと考えられる。誇張や脚色の部分があるとしても、それもまた生の体験から得た感情に由来するものだと言えるだろう。以上の点を踏まえた上で『マノリの回想録』を資料として扱っていく。

まず第 1 章で小説の舞台となっている時代について理解を深めたいと思う。ここでは 20 世紀初頭のトルコとギリシャの関係と 1923 年のトルコ・ギリシャ間の住民交換について触れる。第 2 章では資料となる『マノリの回想録』を物語のあらすじを含めて紹介したい。そして第 3 章では第一次世界大戦中にマノリが参加した労働者大隊 (Amele Taburu) と脱走兵の状況を見ていこうと思う。この労働者大隊に焦点を当てた理由は、キリスト教徒達が徴兵され労働に当てられていたという記述²があったからである。この労働者大隊に関する先行研究や文献はひじょうに少なく、今回見つかったものは Leyla Neyzi 編集の *Amele Taburu*³である。しかしこの文献は入手できなかったため未見である。

これに対して 1923 年のトルコ・ギリシャ間の住民交換についての文献はかなり多く、ここでは比較的新しく出版されたものをあげたいと思う。Renee Hirschon によって編集された *Ege'yi Geçerken 1923 Türk-Yunan Zorunlu Nüfus Mübadelesi*⁴は 2005 年にトルコ語版で出版された研究書である。住民交換を政治や経済、文化、社会など観点別に分類してそれぞれのテーマの研究をまとめている。1923 年の住民交換が与えた影響をフォーカスしたものが多い。1980 年にアテネで出版され、2001 年にトルコ語で出版された Küçük Asya Araştırmaları Merkezi の *Göç*⁵はギリシャに移住した人々のエピソードを地域別にまとめたものである。それに対してギリシャからトルコへ移ったイスラム教徒のを中心としているのが 2003 年に出版された Mehmet Ali Gökaçtı の *Nüfus Mübadelesi: Kayıp Bir Kuşağın Hikayesi*⁶である。

また、オスマン帝国下のギリシャ人についての文献は Dimitiri Gondicas と Charles Issawi の編集による *Ottoman Greeks in the Age of Nationalism*⁷があげられる。この研究書に掲載されているのは、19 世紀後半から 20 世紀前半のオスマン帝国のギリシャ人の政治活動及び経済活動をテーマにしたものがほとんどである。つまり都市部で生活していたギリシャ人の様子が主であり、『マノリの回想録』で扱われているような農村の記述は少なかった。

² Sotiriyu, p.54.

³ Leyla Neyzi(ed.), *Amele Taburu: The Military Journal of a Jewish Soldier in Turkey During the War of Independence*, Istanbul: The ISIS Press, 2005. 著者未見。

⁴ Renee Hirschon(ed.), *Ege'yi Geçerken 1923 Türk-Yunan Zorunlu Nüfus Mübadelesi*, Müfide Pekin&Ertuğ Altınay(tr.), Istanbul, 2005.

⁵ Küçük Asya Araştırmaları Merkezi, *Göç*, Herkül Millas(ed.), Damla Demirözü(tr.), Istanbul: İletişim Yayınları, 2004(4th ver.), first published in 2001.

⁶ Mehmet Ali Gökaçtı, *Nüfus Mübadelesi: Kayıp Bir Kuşağın Hikayesi*, Istanbul: İletişim Yayınları, 2004(3rd ver.), first published in 2003.

⁷ Dimitri Gondicas & Charles Issawi (eds.), *Ottoman Greeks in the Age of Nationalism*, The Darwin press, 1999.

第1章 20世紀初頭のトルコとギリシャ

1. バルカン戦争から第一次世界大戦へ⁸

1911年9月にイタリア・トルコ戦争が勃発し、オスマン帝国の弱体化が明らかになると、バルカン諸国は共同で、残存するオスマン領の分割を画策し始めた。第一次バルカン戦争は、9月25日のモンテネグロのオスマン帝国への宣戦布告で始まり、ギリシャも10月5日に参戦した。ギリシャはすぐにテッサロニキを占領する。11月にオスマン帝国は他国と休戦協定を締結したが、ギリシャだけはこれを拒否し領土の拡大・回復を目指して戦争を続行した。事態收拾のため12月に開かれたロンドン講和会議にはギリシャも参加したが、オスマン帝国は領土割譲に頑強に抵抗したため、会議は一時中断され、翌年1月にバルカン戦争は再開された。ギリシャはさらに侵攻を続けたが、この間に列強の仲介で和解へ向けた手続きが再開され、1913年にロンドン和平条約が調印された。

しかし講和条約の締結によってもマケドニアをめぐる各国の対立は収束しなかった。そして6月には第2次バルカン戦争が勃発した。この戦争は、ブルガリアがギリシャ・セルビアに対して攻撃をしかけ始まったが、ルーマニアとトルコもすぐに参戦したためまもなくブルガリアは降伏した。

7月に締結されたブカレスト講和条約でギリシャはカヴァラを獲得し、11月のアテネ条約によりギリシャ・トルコ間の戦争状態も解消された。このバルカン戦争がギリシャにもたらした利益は大きく、ギリシャは国土を90%、人口を80%も増加させた。国土の拡大により新たな内政問題や、領土回復を狙う近隣諸国との安全保障の問題、さらには戦争による財政赤字などでギリシャは国力の回復を図る必要があった。

しかし1914年6月サラエヴォ事件により第一次世界大戦が勃発し、混乱する世界情勢にオスマン帝国もギリシャも巻き込まれていく。ギリシャははじめ中立の立場を取り、同年秋にはオスマン帝国は枢軸国側で参戦した。

1917年4月アメリカの参戦によって戦況が協商国有利に転換し始めると、ギリシャは枢軸国との関係断絶と宣戦布告を採択し、1918年9月にはテッサロニキ戦線に部隊を送った。これによりバルカンの戦況は一変し、11月にドイツが降伏して第一次世界大戦は終結した。

2. 小アジア戦争⁹

戦勝国の一員としてギリシャはパリ講和会議に参加した。勝利への貢献の報酬としてギリシャはイズミル¹⁰とその後背地を求めた。この時ギリシャが要求したのは小アジア西部、東トラキア、北イピロスで、とりわけ小アジア問題では連合国の思惑が錯綜していた。

⁸主に桜井万里子編『ギリシア史』（新版世界各国史 17）、山川出版社、2005年、321-327頁による。

⁹ 同上、327-330頁。

¹⁰ 当時ギリシャ人人口はアテネよりも多かった。

しかしまだ何も決定しないうちにイタリア軍の分遣隊が小アジア南西のアンタルヤに上陸しイズミル地方へ向かい始めた。ギリシャもこれに対抗し 1919 年 5 月にイズミルを占領し、小アジア内部に侵攻を開始した。アメリカ、イギリス、フランスもこれを認めた。

表向きの目的はトルコの報復行為からイズミルに住むギリシャ人を守ることであった。しかしこの上陸でギリシャは残虐行為に走り、トルコ人およそ 350 人がギリシャ軍と戦って死傷した。ギリシャ側の犯人は容赦なく処罰された。¹¹

小アジアでは連合国による占領に加えて、非トルコ系民族の分離主義が広がり始め、危機感を覚えたトルコ系住民は各地で自発的な抵抗運動に乗り出した。ムスタファ・ケマルはこの動きを組織化し、オスマン政府を否定してアンカラにトルコ大国民議会を結成した。ほどなくトルコとギリシャ軍の間で変則的な戦争が始まった。

ケマル派の台頭により小アジアから連合国が撤退した後も、ギリシャは侵略を続けブルサを含む小アジア西部の主要都市とエディルネを占領していた。しかしケマル率いるアンカラ政府は小アジア西部の戦線立直しに成功し、1921 年 1 月イノニュの戦いでギリシャ軍を撃退した。対するギリシャ軍も 6 月には国王コンスタンディノスが自らイズミルに上陸し奮闘した。イギリスの援助を得て猛攻するギリシャ軍は、7 月にアフヨン、キュタヒア、エスキシェヒールを次々占領していった。しかし 8 月サカリヤ川の戦いでギリシャ軍は崩れはじめ撤退した。そして翌 9 月トルコ軍はイズミルを奪回し、ギリシャ軍を小アジアから駆逐した。¹²

3. 1923 年住民交換

1923 年 7 月に締結されたローザンヌ条約により戦後のトルコ・ギリシャ関係は確定された。トルコは東トラキアを奪還し、ギリシャはインブロスとテネドス、およびイタリア領のドデカニサを除く全てのエーゲ海の島を獲得した。

さらにこの年の 1 月にトルコ・ギリシャ間の住民交換協定が締結され、その結果、トルコ領内の約 110 万人の「ギリシャ人」とギリシャ領内の約 38 万人の「ムスリム」が強制的に移住させられた。この時、イスタンブールとその周辺のギリシャ人、および西トラキアのムスリムは例外とされた。¹³これによりトルコは長年に渡って商工業に従事し、アナトリアと、都市を支えてきた貴重な民族要素を失った。この住民交換はトルコ・ギリシャ両国民国家が、宗教を異にする隣人を「同胞」として受け入れられなかったことを意味しているだろう。¹⁴

住民交換の問題点のひとつは、どの民族であるかの基準が宗教のみだったため、トルコ語を母語とするギリシア正教徒は「ギリシア人」とされた一方、バルカン南部のスラヴ系

¹¹ リチャード・クログ、高久暁訳『ギリシャの歴史』（ケンブリッジ版世界各国史）、創土社、2004 年、85 頁。

¹² 新井政美『トルコ近現代史』、みすず書房、2001 年、171-172 頁。

¹³ 桜井、前掲書、329-330 頁。

¹⁴ 新井、前掲書、187 頁。

やギリシャ系のムスリムはトルコ系のムスリムと同様に扱われたことである。この住民交換によりギリシャでは、ギリシャ人の民族占有率を高めることにはなったが、流入民は経済的には重い負担となってギリシャを圧迫することになった。また、この時の流入民の多くが共和国のギリシャ語とは異なるギリシャ語方言の話者であり、彼らがギリシャ社会に適応するには十数年もの時を要したといわれている。¹⁵

第2章 『マノリの回想録』について

1. 著者¹⁶

ディド・ソティリユ (Dido Sotiriyu) は 1909 年アイドゥンに生まれた。父はアイドゥンで成功した実業家であり、石炭工場を所有していた。第一次世界大戦後、彼女の家族はイズミルへ引っ越した。そして 1922 年 9 月 9 日、トルコ軍がイズミルへ進軍する直前に彼女達は船でギリシャへ移住した。家族は全員無事生きていたが、全財産を失った彼女の父はピレアス港で港湾労働者として生計を立て始めた。

ソティリユはジャーナリズムに携わり、共産主義者活動家として活動した。1959 年 50 歳の時にようやく初の著書 *Ī Nekroi Perimenoun* (死が待っている)¹⁷が出版された。この作品では小アジアで生まれ育ち、ギリシャへ移住した 1 人の女性の人生を描いている。1963 年に出版された 2 作目『マノリの回想録』は、小アジアの西部からギリシャへ移住したギリシャ人の自伝的物語であり彼女の代表作となった。1977 年にギリシャで実施されたアンケート調査ではこの作品はギリシャのベストセラーの 1 つに入っている。ブルガリア語、ロシア語、フランス語、ハンガリー語、トルコ語、英語の翻訳版も出版された。¹⁸2004 年 9 月、肺臓の病気で彼女はその生涯を閉じた。¹⁹

ソティリユは『マノリの回想録』の主人公であるマノリ・アクシヨティスについて、本の冒頭で次のように紹介している。

この物語で一人称で語っているマノリ・アクシヨティスはアナトリアのギリシャ系の農民のシンボルである。マノリ・アクシヨティスは 1914 年から 1918 年の間労働者大隊 (Amele Taburu) に属し、アナトリアにギリシャ軍が侵攻するとギリシャの制服を背にまとい参加

¹⁵ 桜井、前掲書、2005、329-330 頁。

¹⁶ 主に Peter Mackridge, “Yunan Romanında Küçük Asya Miti” in Hirschon, R., ed., *op. cit.*, pp. 347-364.

¹⁷ Sotiriyu, D., *Ī Nekroi Perimenoun* [Ölüler Bekler], Kedros, Atina, 1959. 著者未見。

¹⁸ Sotiriyu, p. 4.

¹⁹ Sabah. (2004.9.25). (<http://www.sabah.com.tr/2004/09/25/dun106.html>). 2006. 1.11 取得。

した。その結果捕虜になり、最後にはギリシャで難民たちが味わった苦い体験をした者の 1 人となった。亡命した後 40 年間、労働組合活動をする。第二次世界大戦に続くギリシャ民族主張運動へ参加した。退職後 60 年以上の経験を、辛抱強く辛い目にあいながら執筆した。なぜなら彼は読み書きを正しく知らなかったからである(p.5)

この記述によるとマノリは実在した人物のようにとれる。しかしソティリユの小説を紹介する記事²⁰や論文²¹において、マノリが実在の人物であるという記述は見あたらなかった。ソティリユが、マノリ・アクシヨティスという実在の人物が執筆した体験記を基に小説『マノリの回想録』を執筆した、あるいは、この紹介文を小説の一部として構成しているなどの可能性が考えられるが推測の域を出ない。

2. あらすじ

作品は全 4 章で、1 章楽園の暮らし (Cennet Hayatı)、2 章労働者大隊(Amele Taburu)、3 章ギリシャの侵攻(Yunanlılar Geliyor)、4 章大惨事(Büyük Felaket)というタイトルで構成されている。物語はマノリが子供時代を振り返りながら始まる。

2-1 第 1 章 楽園の暮らし

1 章では平和に暮らしていたギリシャ人の生活が説明されている。マノリはクルクジャ村というギリシャ系住民の農村で生まれ育った。このクルクジャ村はエフェス近郊にあり、自然豊かな村だった。²²村はとても平和で彼は「もしこの世に楽園があるのならそれは私達のクルクジャに違いない」と表現している。²³村には全くトルコ人はおらず、時々村人同士でトルコ語を話す状況はあったが、彼らのギリシャへの愛は心の中で消えない炎のように燃えていた。近郊の村に住んでいたトルコ人とは友好的関係で、お互いに生活に必要な物を売買したり、家を行き来していた。²⁴

マノリの家族は厳しい父と優しい母、姉のソフィア、3 人の兄コスタ、パナゴ、ミハルと弟のヨルギとスタマティの 9 人だった。マノリは兄弟の中で弟のヨルギと一番気が合った。

マノリにはシェブケットというムスリムの羊飼いの親友がいた。2 人はよく山へ行っては遊び暮れ、互いに固い友情で結ばれていた。²⁵ムスリムとキリスト教徒の関係は戦争と共に悪化していったが、2 人の友情は変わらず、そのエピソードは感動的に描かれている。

²⁰ Kızıl Bayrak. (2000. 10. 21). sayı39. arşiv, ana sayfa. (http://kizilbayrak.org/2000/39/sayfa_28.html).

2006. 1. 9 取得.

²¹ Mackridge, P., *op. cit.*, pp. 349-362.

²² Sotiriyu, p.15.

²³ Sotiriyu, p.12.

²⁴ Sotiriyu, p 17.

²⁵ Sotiriyu, p. 20.

マノリの父は息子が読み書きや算数ができるのを見て、イズミルへ行き商人の手伝いするように告げる。マノリにとってシェブケットに別れを告げることはひじょうに辛いものだった。²⁶

マノリがイズミルへ初めて行ったのは 1910 年の 9 月だった。大きな都市の真ん中で自分 1 人になった時の恐怖を今でも彼は昨日のように思い出すと語っている。知り合いもおらず完全に孤独を感じていた。²⁷

イズミルは「異教徒のイズミル (Gavur İzmir)」と呼ばれ、1922 年以前の人口の半分近くをギリシャ系が占めていた。彼らは商業で成功し都市の経済活動の実権を握っていた。²⁸ 当時のイズミルのギリシャ人達の様子が描かれている。マノリはイズミルで様々な職を経験する。ドーナツ売りとして働く不安定な時期もあった。酒場で働いたり、パン屋で見習いとして働いたりもした。皮なめし工場も経験し、ついには蹄鉄工の店で働いた。マノリはこの街を「貧しい者達への門が大きく開かれている」と表現している。六ヶ月間職を転々とした後、ニハジェット・ヤナコス・ルルディヤスの商館で好条件の仕事を見つけた。ルルディヤスはトルコ人に「凶暴な犬 (zalim köpek)」と呼ばれる密輸業者だったが、マノリの目には謙虚で申し分のない人物に映った。²⁹

ルルディヤスの商館での生活はマノリにとって快適なものだったが、父からの手紙により商人のシェイタノールのところで働くことになった。父は密輸業者のもとで働くことに反対したのだ。シェイタノールはマノリに宴を開くときの使用人の手伝いを仕事として与えた。シェイタノールの館での贅沢な暮らしが繰り広げられていた。³⁰

1912 年バルカン戦争で 2 人の兄ミハルとパナゴはトルコ軍に徴兵された。しかしミハルは脱走に成功しギリシャへ行きギリシャ軍へ参加した。このことを父親を始めとして村中のギリシャ人が賞賛した。

この時期中東では、トルコ人が苦しんでいるのは商業と財産を握っている外国人のせいであると書かれたパンフレットが出回っていた。それは異教徒はトルコ人にとって有害であると示唆するメッセージだった。このことを中東旅行から帰ってきたシェイタノールの息子からマノリは知る。しかしトルコ人とギリシャ人は実際仲が良く、同じ土地に育った者同士、憎みあうことはなかったとマノリは語っている。³¹

彼の父は 70 歳で亡くなった。村の慣習通りに長男に財産の大部分が譲られた。土地を相続した長男のコスタはマノリに村に戻って畑を手伝うことを望んだ。マノリは気が進まなかったが、否応なしに兄に従った。マノリは農作業においても常に新しいことを試みようとしたが、他の兄達と全く意見が合わなかった。ヨルギだけはいつも良き理解者であった。

²⁶ Sotiriyu, pp. 19-22.

²⁷ Sotiriyu, p. 29.

²⁸ Küçük Asya Araştırmaları Merkezi, *op. cit.*, p. 29.

²⁹ Sotiriyu, pp. 36-40.

³⁰ Sotiriyu, pp. 42-43.

³¹ Sotiriyu, pp. 44-45.

ギリシャに逃げたミハルがある日村へ帰って来た。家族は大喜びしたが、ミハルが金が必要で遺産の分け前をもらうために村へ来たと言うと空気が変わった。兄弟で議論し合い、喧嘩になった。それを最後に上手く収めたのはマノリだったが、その行動に理解を示したのもヨルギであった。³²

2-2 第2章 労働者大隊

2章では1914年から18年の第一次世界大戦中のギリシャ系住民たちの経験が描かれている。1914年第一次世界大戦が勃発し、クルクジャ村の若者は労働者大隊（Amele Taburu）に徴兵されていく。労働者大隊は飢えと拷問と重労働の辛いもので、脱走した者はジャンダルマの厳しい搜索に追われた。またこの時期は近隣のトルコ人との関係も変わり、トルコ人は武装してギリシャ人を一掃する動きを見せ始める。³³その様子は次章で詳しく見ていくことにする。

1915年1月にマノリは徴兵されアンカラへ送られた。マノリは労働者大隊についてひどい噂はたくさん聞いていたが、脱走した者がどんな生活を送っているかをよく知っていたため、労働者大隊の方がましだと考えていた。³⁴

初めに送られた隊では、マノリは木炭を調達する任務を請負ったため、普段は山に仲間10人でこもっていた。そのため兵舎での惨い拷問を受けることはなかった。この兵舎でチフスが蔓延し、マノリは同じ村出身の友人コスタ・パナゴールとフリスト・ゴリスを失う。

³⁵

なんとか助かったマノリは休養をもらい4ヶ月クルクジャ村で過ごす。休養を延ばして村に長く留まろうとしたが、ジャンダルマに引き渡され再びアンカラへ送られた。今回はマノリの隊はヤブシャン村に滞在していた。その村でトンネル開通工事の労働をし、その後戦争で人手不足のトルコ人の農村へ送られた。³⁶

マノリの奉公先のトルコ人アリ・ダユは紳士的な人物で、兵士達的环境は比較的良かった。彼にはアドビエという娘がおり、アドビエとマノリは男女の関係になっていった。アドビエはマノリのためにムスリムからキリスト教徒になることも構わないと考えていた。

しかしマノリはアドビエを振り切って仲間と脱走し、村を目指した。なんとか無事村には帰れたが、マノリはまたすぐにジャンダルマに捕まりアジジェの兵舎へ送られてしまった。³⁷

アジジェでも脱走を図るが結果は同じで、すぐに捕まっては兵舎に戻り、イスタンブールやソアンルへも送られた。それでも隙を見て逃げ出したマノリは、その途中出あった人々

³² Sotiriyu, pp. 47-51.

³³ Sotiriyu, pp. 54-60.

³⁴ Sotiriyu, p. 71.

³⁵ Sotiriyu, pp. 73-81.

³⁶ Sotiriyu, pp. 81-90.

³⁷ Sotiriyu, pp. 91-117.

に助けられて終戦まで逃げ延びた。この時出会ったのは、イスタンブール出身のアナスタシという商人や彼に紹介されたマダム・フォフォという女性、そして以前マノリが脱走を手伝ったキルコルとその妹アニカだった。キルコル達の家にはマノリは終戦まで隠れながら生活をしていた。³⁸

彼らに別れを告げ、村に戻ったマノリは家族と再会する。兄のコスタとスタマティも帰還した。この戦争で彼らの家族はヨルギとパナゴを失うことになった。³⁹

2-3 第3章 ギリシャの侵攻

3章では1919年ギリシャがイズミルに侵攻し始めた時期が描かれる。今度はギリシャ人たちが虐殺と侵略の破壊行為を行うようになった時期である。

マノリ達ギリシャ人はもうトルコ人を気にして怯えることはなかった。クルクジャ村の住民は降伏したドイツ人がそのままにしていった軍需品倉庫から、武器や弾薬を村へ運び始めた。村人は大股で堂々と胸を張って歩いていた。クルクジャ村の人が武装したことを聞くと、近郊の農村のトルコ人たちは家や畑を残してショケやクシャダスへ移住した。ギリシャがイズミルへ上陸したという知らせがくると、近くの5つのトルコ人村が廃墟と化した。ギリシャ軍が村へ来た日は皆理性を失ったようだった。村中がお祭騒ぎの状態になった。⁴⁰

マノリはカティナという女性と結婚を考えていた。カティナはフォティス牧師の姪だった。フォティス牧師はマノリの家と彼女の家が釣り合っていなかったので、マノリの彼女に対する愛を信じようとはしなかった。マノリは彼女と婚約しようとしたが、小アジアに住むギリシャ市民を対象にした徴兵が行われ、離れることになってしまう。⁴¹

クルクジャ村出身の400人がイズミルに集められた。彼らは「トルコ人を撃退するぞ!」と大声で誓った。カティナからの手紙が来て返事を書いたが、その後全く返事がこなかった。さらに2通手紙を送ったが結果は同じだった。

25日間の訓練の後、マノリはまず第1部隊へ送られ、その後第31部隊とベルガマの治安部局へ送られた。そして3ヵ月後マノリのいた分隊はダウンダルルへ送られた。その地域ではキョル・メフメトというゲリラによって被害にあっており、ギリシャ人たちが殺されていたためであった。

マノリ達は伍長に率いられキョル・メフメトの家に捜索に行き、そこで彼の娘婿を捕まえた。この男は尋問とひどい拷問を受けたが口を割らず、一度脱走を試みたあげく連れ戻されてさらに酷い扱いを受けた。この頃にはギリシャ人が酷い暴力を振るうようになっていた。マノリもついにはこの男を棒で殴って殺してしまう。しかしその後味はひじょうに

³⁸ Sotiriyu, pp. 118-129.

³⁹ Sotiriyu, pp. 130-133.

⁴⁰ Sotiriyu, pp. 134-135.

⁴¹ Sotiriyu, pp. 136-142.

悪かった。⁴²

隊の中でマノリは銃の腕がいいと評判だった。そのため、ウシュクルの近くにあった監視所へ送られた。他に 4 人の仲間とそこへ向かう際、突然トルコ人達の銃撃にあった。マノリは重傷ではなかったものの負傷し、イズミルの病院へ入院した。病院から姉に手紙を書き、自分が怪我をしたこととカティナに会いたがっていることを彼女に伝えてほしいと頼んだ。1 週間後、マノリの前に現れたのはカティナではなく姉だった。姉はカティナがもうクルクジャにはいないことやフォティス牧師が彼女をある大尉と結婚させたがっていたことなどを語った。マノリは彼女にふさわしくないと考えていた牧師によって 2 人は引き裂かれていた。マノリは一晩中廊下を歩きながら苦悩し、失恋の痛みを振り切るかのように戦線の前線へ派兵するよう上司に求めた。⁴³

1921 年 10 月に第一師団の第四連隊の通行証を手に入れた。移動の列車の中でマノリは自分と同じ隊になるクレタ島出身のニキタ・ドロサキスと知り合う。ドロサキスとの友情を中心に 3 章の後半は展開する。マノリとドロサキスは戦争のなかで苦難を共にし、2 人の友情は深くなっていく。マノリもドロサキスも戦争とは何のためなのか、自分たちが戦場にいる意味は何か、といったことを考える性格で、お互いの考えをよく話していた。⁴⁴ドロサキスは共産主義者だった。そしてもう 1 人、ドロサキスのクレタ島からの友人レフテリ・カナキスも同じ師団にいた。⁴⁵レフテリは社会主義を信じていたが、戦争にはあまり興味はなかった。

マノリは兵士達がトルコ人の村を略奪するのを見て、1914 年のトルコ軍を思い出す。今度はトルコ人が抵抗する側になったとマノリは思うのだった。⁴⁶

1922 年春、マノリ達の部隊はアフヨンカラヒサルの辺りに滞在した。⁴⁷戦争の中でマノリはしばしばクルクジャ村を思い出しては懐かしんだ。戦争でドロサキスは重傷を負い入院した。そして戦況もどんどん悪化していった。⁴⁸

2-4 第 4 章 大惨事

4 章はトルコが決定的勝利を収める 1922 年 8 月から 1923 年の住民交換によりマノリがアナトリアを離れるところまでが描かれている。

1922 年 8 月マノリはアフヨンカラヒサル戦線へと送られていた。状況は過酷だった。死に向かい合いながら眠れぬ夜を過ごし、ついに退却命令が出た。すぐにマノリ達の隊はその場を出発したが、次の朝到着した村の光景を見て恐怖に陥った。村は廃墟と化し、ばらばらになった死体や大砲、車、衣類がそこら中に散っていた。戦況がわからないままマノ

⁴² Sotiriyu, pp. 143-147.

⁴³ Sotiriyu, pp. 149-151.

⁴⁴ Sotiriyu, pp. 153-167.

⁴⁵ Sotiriyu, p. 161.

⁴⁶ Sotiriyu, p. 172.

⁴⁷ Sotiriyu, p. 173.

⁴⁸ Sotiriyu, pp. 174-184.

リ達は不安な時間を過ごした⁴⁹。

何時間も待っていた連絡係がやっと現れ、「戦線は陥落し、軍はばらばらの状態だ」という報せを聞くと兵士達は皆すぐさま逃げ出した。村でも人が逃げ出し、その状況が描かれている。車を奪い合い、列車に乗るために丸 2 日間戦わなければならなかった。マノリはやっと列車に乗ることができた。その道中も次から次へと人が乗り込んできた。⁵⁰

イズミルに着くと、そこはもはやマノリの知るイズミルではなかった。そこは「死の街」だとマノリは表現している。そこでマノリはある老人に会った。彼はギリシャ軍が勝利することを信じきっていて、マノリは本当のことを言えずにいた。⁵¹

ついにギリシャ海軍が退却し始めた。人々はただ呆然とそれを見ていた。その時、フランスの装甲艦がギリシャ国歌を流してギリシャ海軍を見送るという行為をした。これに対し民衆は激しく怒り、口々に罵り出し、海に飛び込む者もいた。

マノリはケメル駅で家族に会い、それからしばらく一緒に過ごす。⁵²この時イズミルは炎に包まれ、街は大混乱を極めた。何人もの人が海に飛び込んで溺れていた。マノリの中で絶望と怒りがこみ上げていた。⁵³

ギリシャ人の 18 歳から 45 歳の男は戦争捕虜として捕らえられた。女性と子供はギリシャへと移された。マノリと兄のコスタは母に辛い別れを告げた。2 千人が捕虜となりマノリ達はマニサの部隊へと引き渡された。捕虜が受けた酷い仕打ちが描写されている。谷底に集められ機関銃で殺害された捕虜の集団の中にはコスタもいた。⁵⁴

アイドゥン村の土木整備へ行く派遣隊が結成された。無作為に選ばれた 300 人の捕虜の中にはマノリと友人のパノ・ソティロールもいた。派遣隊でも捕虜は暴力と辱めの対象として扱われた。⁵⁵

そしてついにアナトリアを去らなくてはならなくなったマノリは、船の上で自分が関わったトルコ人達を思い出す。⁵⁶

シェブケット！私を知っているだろう？私達は友達だ！何年も一緒に笑ったり泣いたりしてきた。シェブケットは何をしているんだろう？
ああシェブケット、シェブケット！私達は野蛮な動物になってしまった！突然理由もなく、互いに剣を取り傷つけあった！

そしてキョル・メフメトの娘婿……。そうお前だ！なぜそんなふうに憎んで私を見ているんだ？ ああ、そうだと。私はお前を殺した。

⁴⁹ Sotiriyu, pp. 185-188.

⁵⁰ Sotiriyu, pp. 189-195.

⁵¹ Sotiriyu, pp. 196-200.

⁵² Sotiriyu, pp. 201-203.

⁵³ Sotiriyu, pp. 208-209.

⁵⁴ Sotiriyu, pp. 214-218.

⁵⁵ Sotiriyu, pp. 217-221.

⁵⁶ Sotiriyu, pp. 228-229.

そして私は泣いている。お前も殺したんだ！ 兄弟、友人、同郷の者たち・・・大勢が理由なく殺人を犯した！ああ、この苦しみが全てただの悪夢だったならば・・・！

〔中略〕

私の母国へよろしく伝えてくれ、キョル・メフメトの娘婿よ！アナトリアへよろしくと・・・私達が大地を血で染め上げたなどと怨みは言うな・・・ 神よ、兄弟同士を殺し合わせた死刑執行人に災いを！
(p.229)

このマノリのメッセージによって物語は締めくくられている。

3. 資料としての『マノリの回想録』

この『マノリの回想録』を本論の資料として扱うことについて、いくつか触れておかななくてはならない点がある。前述しているようにこの小説の主人公マノリ・アクシヨティスが存在していたのかどうかは定かではない。

一方で、マノリの故郷クルクジャ村が存在したことは事実であり、現在はシリンジエ(Şirince)という地名である。⁵⁷クルクジャはギリシャ人の村であり、第一次世界大戦中に村の若者が労働者大隊(Amele Taburu)に徴兵されたことも事実のようである。⁵⁸次章で取り上げる労働者大隊に限らず、『マノリの回想録』には史実と一致するシーンが全編にわたって見受けられる。

その1つが1922年イズミルで発生した大火災である。1922年8月26日トルコ軍はギリシャ軍を撃退し、これをイズミルへ壊走させた。9月9日、トルコ騎兵隊がイズミルに入場したが、その時点でギリシャ軍は小アジアから撤退していた。そして9月13日、まさに戦争が終結しようという時に、イズミルで大火災が発生し、町の半分を焼き払って多数の犠牲者を出した。⁵⁹この大火災のシーンが4章で描かれている。

炎はどんどん広がっていた。そこら中から飛び出してきた、恐怖で気が狂った数百、数千人の人々は一瞬で港へと殺到した。

「神よ、お助けください！」

「我々を救いたまえ！」

⁵⁷ Şirince guide.

(<http://www.sirinceguide.com/tr/default.asp?cat=transport>) . 2006.1.9 取得.

⁵⁸ Şirince guide. 同上.

Türkiye Taşkömürü Kurumu(TTK).

(<http://www.taskomuru.gov.tr/havzatarihi.htm>). 2006.1.9 取得

⁵⁹ ジョン・フリーリ著、鈴木董監修、長縄忠訳『イスタンブール：三つの顔をもつ帝都』、NTT出版、2005年、362頁。

「我々に哀れみを！」

逃げる人間はだんだんと密度を濃くしていった。人々は互いにもう区別がつかなくなっていた。私は前に進むことも留まることもできず、ただどんどん膨れ上がって四方へ溢れ出す真っ黒な川を見るだけだった。前方には海が、後方には炎と死があった！町の奥から周囲へパニックをまき散らすうなり声が聞こえた。

「奴らは俺たちを惨殺している！」

「慈悲を！」

そして海では、すでに堤防は堤防でなくなっていた。数千人の人が海に飛び込んで溺れていた。水中では人が獣の死体のようだった。通りは溢れ返っては空になり、また溢れ返っていた。若者も年寄りも女も子供もお互いに踏み潰し合い、死んでいった。奴らの攻撃は銃剣と小銃が止まらず使われ続けた。

「奴らを打て！」(p.208)

『マノリの回想録』の各章はそれぞれアナトリアのギリシャ人たちが巻き込まれた歴史事件を軸に構成されている。1章は第一次世界大戦以前の平和な暮らしを、2章は1914–18年の第一次世界大戦下のアナトリアのギリシャ人を、3章は1919年ギリシャがイズミルに侵攻する年を、そして4章ではギリシャの敗北が決定し1923年住民交換協定によってギリシャ人がアナトリアを離れるところまでを描いている。

作品で描かれている時代は著者のソティリユ自身も経験したものであり、また、上記のシーンのように史実と一致するものもあることから完全に想像から創作されたものとはいえないだろう。

Mackridge はソティリユの『マノリの回想録』について、作家の個人的経験を1922年以前の時代に対する視点を明らかにして形成している作品だと紹介している。⁶⁰また、トルコの新聞 *Kızıl Bayrak* でも『マノリの回想録』では「空想」はないと言われるほど少なく、真実に非常に近いものだと紹介されている。⁶¹

小説としてエンターテインメント性を高めるための脚色や誇張表現はもちろん、ギリシャ語の原作がトルコで翻訳出版される際にさらに脚色されている可能性⁶²など、資料として考慮すべき点は多い。しかし、当時を体験した作家によるこの作品は、当時のアナトリアをギリシャ人の視点から見ていくうえで価値ある資料だと考えられる。小説だからこそ描かれている人々の感情や情景などを、貴重な情報として捉えることも可能であろう。小説を

⁶⁰ Mackridge, P., *op. cit.*, p.349.

⁶¹ *Kızıl Bayrak*. (2000. 10. 21). sayı39. arşiv, ana sayfa. (http://kizilbayrak.org/2000/39/sayfa_28.html).

2006. 1. 9 取得.

⁶² Sotiriyu はフランス語翻訳版からトルコ語に Atilla Tokath によって翻訳された。

歴史資料として扱うことにおいて不完全な部分はあるが、上記の点を考慮にいたしたうえで本論では『マノリの回想録』を資料として扱いたい。

第3章 労働者大隊と脱走兵

1. 労働者大隊

1-1 労働者大隊

1914年の冬、マノリの住むクルクジャ村では毎晩村人が議論をくり返していた。話の内容は労働者大隊（Amele Taburu）であった。この時期トルコ政府はキリスト教徒達を武器も制服も与えずに労働者大隊と呼ばれる特別部隊へ送っていた。⁶³この節では労働者大隊に関する記述を扱っていく。

以下は村の老人が労働者大隊の息子からもらった手紙の内容を説明している記述である。

「…私のテミストクレスが兵に取られてからまだ1ヶ月経っていないが、私に脱走すると報せをよこした。耐えられないと…。心ある敵ならしないような拷問を奴らはしているんだ。戦争捕虜の方が奴らに比べてよっぽど人間らしい振舞いをする！ 飢え、シラミ、汚臭、1日18時間にも及ぶ労働…そしてうろたえたり、反抗すればムチと様々な拷問。政府は食べ物だけは与えていた。それは犬でさえ食べれないようなものだ！15～20人の兵士が同じ汚い食器の中から食べている。汚れた洗濯物もその皿の中で洗わなくてはならない。食事が何か？口にできないスープと動物の死骸の肉だ！『大食いの奴はなんとか2,3口食えるだろう。でも上品になって嫌がっていると自分がダメになってしまうことは明らかなだ、なぜなら空腹なままになるから。そして一度は拒否したその食べ物を友の口から奪おうとするほどどうかしてしまった。』と息子は書いていた。」（pp.54-55）

マノリの最初の徴兵は1915年の1月だった。70人前後の兵役未経験の候補者と共にクシャダスへ行った。兵士台帳に登録された後、準備を整えるために村へ送られた。そして2月にマノリは村を出発した。⁶⁴

私はアンカラから80キロ離れたキリスレル村に滞在していた「第二労働者大隊」へ送られた。その地区には道の修復と戦争前にフランス

⁶³ Sotiriyu, p.54.

⁶⁴ Sotiriyu, pp.71-72.

の会社が始めた鉄道路線を完成させるために 12 人の兵士がいた。

彼らが 4 人の脱走兵を捕まえて私達を周りにぐるっと並ばせた後、その哀れな者達にひざをつかせた。司令官は罵りと脅迫が詰まった話を手短かにして、牛の尻尾のようにムチを打ち、手と腕をきつく縛られた脱走兵に攻撃した。悲鳴とうめき声がムチの音と入り混じっていた。疲れで息を切らした司令官は順番をジャンダルマ⁶⁵に譲った。裂けた肉から真っ黒に血が流れていた。ムチが終わると彼らを立たせて「腕輪」と表現したものを体にはめた。1 つ 2, 3 オッカ⁶⁶の重さで先が太い鉋釘のついた鉄の輪だった。この重りを付けて食事をし、工事をし、石を砕き、体を伸ばして寝ていた。

肉体的にも精神的にも圧迫し、人を貶めることなら何でも考案された。拷問が続くとズボンがずり落ち、性器が曝け出された。つばと鼻水と糞尿と涙が血に混ざり合っていた。

この儀式が終わった後私達は中隊へ配属された。その道中、重りを付けられた 200 人の人々を見た。彼らがどうやって耐えているのかは謎だった。

初日の夜、私達の地区で同じ隊の 6 人に偶然会った。

「この地獄へ落ちてきてどうだい？お前らは狂ってる！お前らの脳に一発撃ちこめば 1000 倍はましだぞ！俺達はここで犬のように死んでいく…」

彼らを勇気付けたが、横になって寝ていた時、牛の尻尾のムチと鉄の輪のダンスが始まった。中年男性が傍にいて仲間の一人にささやいていた。

「奴らがお前を捕らえて首吊りか、銃殺してくれればこれよりましだ！〔中略〕」

他の者が割って入った。

「オレは逃げ出すぞ！奴らの好きなだけ鉄輪を体につけられ、もうオレは耐えられない…」(p.72-73)

マノリは二度目に送られたヤブシャン村の労働者大隊の兵舎の様子をこう語っている。

今回はテントで寝ることが可能であり、毎週金曜日に清掃があった。シラミは一掃され、病人は病院へ送られた。しかし飢えは辛い待遇のなかでも最も恐ろしいものだった。私達の服も食べ物も金も、何であ

⁶⁵ 国内治安と地方における警察活動をになう軍隊の一部の組織。

⁶⁶ 1 オッカ 1283 g に相当。

ろうとあるものは全て護衛たちが奪っていき、小包でさえもしっかり狙っていた。私達は石を砕き、トンネルを掘り、道を作るために1日に15時間労働していた。朝から晩まで空腹でうめいていた。兵士用のパンの配給を1日中狂ったように待ち、一晩中その記憶を恋しく思いながら身悶えていた。

私達は皆ひどく気が立っていた。石の枕、シラミのいる大袋、一切れのパン、トイレの順番…互いに何にでも取っ組み合いを始める準備をしていた。最後には強欲で恥知らずになっていた。(p.84)

労働者大隊の中でジャンダルマは兵士達と取引をしていたようだ。

ジャンダルマ達は商売取引をうまく成立させていた。一握りの乾いたブドウと引き替えに私達の身ぐるみをはいでいた。買い物のため村へ1人で行く権利は私達にはなく、ほとんどの者が空腹に耐えられなくなり靴や服を一切れのパンに換えた。これらの者達の多くは半裸の状態で寒さに耐えれず死んだ。(p.85)

1－2 労働の様子

マノリが2度目に送られたヤブシャン村ではトンネル開通工事が主な仕事であった。900メートルのトンネルを掘るために特に健康で丈夫な者達が集められ、その中にマノリもいた。

私達は山の一方を、もう1つのチームは別の側を掘り始めた。1日に18時間働いていた。岩に穴を開けるために使う巨大な金づちと小さなドリルがあり、ダイナマイトは与えられず、黒い火薬だけを利用できた。二手に別れて、毎日特定の数値まで地下トンネルを掘っては爆発させる必要があった。できなければムチ打ちが待っていた。取り除かれた土を以前は手押し車で私達が運んでいたが、後に小さなワゴンが持っていくようになった。これは私達の仕事を軽量化した。岩を割るためには力が必要であり、私達は飢えで痩せ、散々に荒れはて、病気で疲弊しきっていた。ほとんどの者が血を吐いて、その後死んでいった。(p.85－86)

やっとトンネルが開通した時のことをマノリは以下のように述べている。

トンネルが終わり、2つのチームが山の中央地点で出会った瞬間は、

なんという喜びと興奮であっただろう。〔中略〕

トルコ人もギリシャ人も私達は一瞬の間、全てを忘れていた。協力して家を1軒建てた後、座って疲れを癒すタバコと一緒に吸い、初の食事を一緒に取る兄弟のように、手をきつく握り合った。しかしこの興奮は長く続かなかった。兵隊長の笛が再び鳴った。

クズルマク川は凍っていた。氷の上を毎朝通って、薪を取りに行く重労働をし、干草の束を背負って運んでいた。その間に新たな災難に私達は見舞われた。私達は年をとって冬の落ち葉のように歯が抜け始めていた。私達に休憩を許可する医者が見えて、効果のある薬草を集めて投じ、私達は救われた。本当に1人1人が弱っており、骨がどこにあろうと皮膚の外へ出そうだった。人は私達を見てぞっとした。人間らしい姿を私達は残していなかった。(p.87)

第二労働者大隊はトルコ農村の奉公へと送られた。⁶⁷村では収穫期に男手がなく、作物が駄目になってしまう危機を迎えていた。2日間の休息の後各村へ兵士達は配置され、マノリは50人の仲間と共にギョルデレ村へと出発した。息子を兵士に取られたトルコ農民は広場に集まり、兵士達が健康かどうかを隅々まで調べた。

マノリはアリ・ダユという村の有力者の元へ6人の仲間と共に送られた。アリ・ダユはギョルデレ村の家で病気で寝たきりの妻と12歳の娘アドビエと一緒に暮らしていた。アリ・ダユは兵士達に対して紳士的な態度を取っていた。

「私にも兵役へ行った3人の息子がいる。だから君達の苦しみを理解している。ここでは君達が食べる物も飲むものも、何ひとつ不自由はない。皆君達に良く振舞うし、君達も仕事に誠意を見せてくれたまえ。」(p.91)

仕事は彼らにとって重労働ではなかった。農場は快適で安らぎがあった。清潔な部屋に寝て、好きなように体を洗うことができた。マノリは「心に喜びが満ちていた。」と述べている。⁶⁸

1－3チフスの蔓延

マノリが初めに送られた第二労働者大隊ではチフスが蔓延した。⁶⁹兵舎の施設は不衛生で病人達が溢れかえり、悲惨な状態であった。

⁶⁷ Sotiriyu, p.90.

⁶⁸ Sotiriyu, p.91.

⁶⁹ Sotiriyu, pp.74-75.

最も重い症状の者は常に腹の中を空っぽにして、ずっと吐いていた。この汚い匂いに、酸っぱい動物の糞の匂いや有毒な息の匂い、屋根の枝から広がるカビの匂いが加わっていた。ぼろぼろになった衣服の中に、髪の毛の間に、まつげの上に、耳の穴に、体中に何百万とシラミが湧いていた。シラミは埋められたかのように皮膚の中にうずまって、まるで体を彫っていくように血を空にしていた。薄暗い中で上がるうめき声やうわ言、ゼーゼー言う声やいびきの音が神経をばらばらにした。すぐに正気を失わなかった者は一足早く死ぬために神に懇願していた。(p.76)

この病の蔓延によりマノリは親しい友人を 2 人失った。地獄絵図のような兵舎の状態を救ったのはトルコ人医師だった。

五月の初め頃シュクル・エフェンディという名のトルコ人の病院長がやってきた。〔中略〕彼は聖人のように私達を救った。戦争も人間の広い心まで奪うことはできなかった。私達の投げ出された状況を見て恐怖に包まれた彼は、重病患者をすぐに病院へ搬送することを命じた。ただちに壁の窓を開けさせ、藁の山と汚い大袋⁷⁰を焼かせ、全ての壁面を殺菌し、白い漆喰を塗らせた。衣類を殺菌するための温風ストーブと一緒に新しいカバーを持ってこさせた。強制的に体を洗い、毛を取らせた。薬とミルクを私達に与え、食器を食事に使えるきれいな状態にした。病気で死ななかった者達のために 4 ヶ月の回復期の休暇にサインをした。3 千人の中から私達 7 百人が助けられたのは、シュクル・エフェンディの広い心のおかげだった。(p.81)

シュクル・エフェンディは休暇許可のカードを記入するために、マノリに手伝いを頼んだ。マノリが彼に感謝の気持ちを述べると彼はこう言った。

「君のためにしたわけじゃない。私は君達のために善行をしたのではないんだ。私は自分の国のためにしたのだ。祖国の仲間と兵士達がひどい状況に陥ったことに目を閉じるならば、私達はどんな国民になるんだ？」(p.81)

シュクル・エフェンディはマノリに、戦争の辛い経験から命のあり方を良く考えるように

⁷⁰ 兵士達は植物性の袋の上で寝ていた。Sotiriyu, p.75.

言うとは故郷でゆっくり休養を取ることを勧めた。

2. 脱走兵

2-1 脱走兵

過酷な労働者大隊から逃げ出す者は当然いた。しかし脱走も相当過酷な選択だったようである。徴兵され初めて労働者大隊に行くことになった時に、マノリは脱走についてこう考えていた。

この労働者大隊は、実際に、あらゆる酷い噂を聞いていたにも関わらず、私は恐怖を感じていなかった。自分の目で見ただけを私は怖がっていた。脱走は毎晩ドアに蹴りを入れるということだった。居場所がなく、隠れる場所を求めてそこら中を這い回り、生きながら埋められ、喉まで泥にまみれながら生きることを意味した。労働者大隊はこれより千倍ましだった。そこに何もなければ、死に向かい合い、日の光の中で若々しく戦うことが可能だ！このように私は考えていたため、私は兵役に行った。(p.71)

脱走兵がどんな生活を送っていたのかの記述は以下である。マノリは自分が労働者大隊へ行く前に、村で脱走兵に食料を供給する仕事を負っていたこともあった。

労働者大隊からの脱走は、もう我慢できずどうしようもなくなってなされることだった。彼らは狩りの獲物のように追いかけられた。井戸の穴に、地下トンネルに、馬小屋の間に秘密の避難所をつくり、何年も閉じこもっていた。(p.58)

以下がマノリが脱走兵達に食料供給の任務をこなす様子である。

脱走兵は団体で山へ出て行った。そしてこの団体を散らす目的で行われる一掃攻撃はだんだんと頻繁になっていった。

この団体に食料供給をする任務に私はついていた。ジャンダルマのすぐ近くで仕事を観察することや、彼らを騙すために一緒になって笑うことを学んでいった。こうして爆薬と食料を脱走兵達へ運んでいた。険しい道を抜けた後、誰にも見られないことを確かめるためにほとんど毎回何時間も待っていた。しかしそれ以降は洞窟へ滑るように進んだ。洞窟の入り口は巨大な岩と雑木林で覆われていたので発見するこ

とは不可能だった。10メートル程続けて進んだ後に棘のような石筈の平原に到着した。提灯の光で石筈はちらちらと光っていた。洞窟の終わりには底なしの崖があった。一時期シェブケット⁷¹と一緒にこの洞窟を探検したが、最後まで続ける勇気が出なかった。そして私はいつも、シェブケットがこの洞窟を思い出して派遣隊へ教えるだろうと考えながら、落ち込んでいた。(p.69)

1915年2月労働者大隊に徴兵されたマノリがイズミルからアンカラへ移動する際の列車の中の中でも脱走を図る者達は大勢いた。

動物用の車両の中に私たちは詰め込まれた。ドアは1日にたった1回だけ開けられた。車両にいた480人のうち310人は宿場に辿り着いた。他の170人は道中いなくなった。列車には10人の護衛がいた。戦利品をなんなく手に入れるため、脱走者には目をつぶっていた。貧しい山から来た貧しい者の目には、母の愛と絶望による諦めの両方によって食料や服で一杯になった170の袋は宝のようだった。

脱走した者のうち、何人が家に無事帰れたのかはわからない。1メートルの厚さの雪の層に覆われた山は陰しく、表面は荒れた裸の状態、これに満たされないかのようにトルコ人脱走兵が蠢いていた。村の通りには駐在所がいくつも建てられた。番人の同情をもらうためには一握りの金が必要だった。そして最後に必要なものは運だった。何千人ものギリシャ人はこのように滅亡していった。(p.72)

二度目に送られた労働者大隊の滞在していた村では脱走兵は見せしめのように晒し者にされていた。

村の広場に3台の絞首台が建てられ、そこに吊り下げられている3人の若者の胸に「私は兵を逃げ出した者だ!」と書かれたボードが吊り下げられていた。兵士達は吊り下げられた友を見て、顔色を全く変えなかった。まるで動じていないようだった。絞首も抑圧も拷問も、人々に脱走を禁止できずにいた。(p.84)

マノリが知り合ったポンタス出身の教師セラフィミディが脱走した時のエピソードは以下である。

⁷¹ マノリの友人のトルコ人。クルクジャ村の近くの山で羊飼いをしていた。

1916 年にポンタスから退く時、トルコ軍は数千人の家族と一緒に引き込んだ。この時、セラフィミディはギリシャ人から編成された労働者大隊へと引き込まれた。彼は 5 ヶ月後に逃げ出したが、ロシア国境まであと 1 キロメートルというところで捕まった。一通り拷問を受けたあと、死刑を宣告された。

「油のついたゆるい結び目を首にかけられた。時間の問題だった。ちょうどその時トルコ人大佐がそこを通り過ぎ、私を見て立ち止まり近づいていた。よく見た後にこう言ったのだ。『お前はグリコリ司祭の甥ではないのか？』私は『そうです』と言った。大佐は死刑執行人のところへ行き『解いてやれ』と命令した。私は自分の耳が信じられなかった。首から結び目が離れると実感が湧いた。大佐は『叔父さんをよく知っている。近所なんだ。トラブゾンで俺達はお前の叔父さんの良い所をよく知っていた。彼の思い出に免じて、お前を助けよう。彼に手紙を書きなさい。』その後知ったのは、この大佐がロシア占領の間、ポンタス支部局を担当する情報機関に關係していたということだった。(p.121)

セラフィミディのようなエピソードも描かれているが、それは例外に過ぎないと考えられる。脱走を図った者は何年も逃げ回りながら日陰の生活をし、もしもジャンダルマに逮捕されれば無事では済まなかった。労働者大隊からの脱走は辛い環境に耐えかねた者の最後の手段だったようだ。脱走兵は厳しい追跡にあい、さらにその家族も脱走兵捜索の家捜しで追い詰められるので、ひじょうに過酷な選択だった。家捜しの様子については次の節で詳しく見ることにする。

2-2 脱走兵の家族

厳しい追跡に遭うのは脱走兵本人だけではなく、その家族も対象になっていたようだ。その様子の記述は以下である。

空が暗くなるかならないかのうちに、年老いた女達の町や村との戦いが始まる。彼女達は息子と夫が脱走兵である母親達だった。4 年間この女性達は誰 1 人、ぐっすり寝ることも安心して食事をすることもできなかった。ほとんどの夜を椅子の上で耳をそばだてては、常に「奴らが来るぞ！」という声に恐怖で飛び上がり、怯えながら過ごしていた。(p.58)

追い詰められた家族の中には気が狂ってしまう者もいた。

コスマ・サラポールの妻はこのために狂ってしまった。部屋に収まらない体格のいい若い3人の息子を彼女は隠していた。彼女の家は小さく、3人の巨体を2つの部屋へどうやって隠そうとしたのだろうか。しかし他に方法がなかった。労働者大隊にいる2人の息子が生きているかどうかを彼女は知らなかった。まだ明るいうちに息子達を地下トンネルへ入れた。そして彼らの母はドアを開けて、手を震える胸に押し付けながら警察官を待っていた。感情のない声で「どうぞ、調べなさい」と言う。

「息子達はどこに隠れているんだ？」

「私が知るだろうか。私に誰か教えてくれるのかい？」

「では俺達が捕まえよう、いいか！俺達からは逃れられない。捕まえた時はお前の目の前で首をそぎ落としてやろう！」

そして奴らは罵りながら離れていった。ひびが入りそうなほど心臓は激しく鼓動を打っていた。手足は凍りつき、冷や汗をかいていた。危険が遠のき、子供達が家に戻ると彼女は声なく泣いてひざをついて祈り始めた。

そしてある夜、彼女は尽き果てたような笑い方で笑い始めたのだった。息子達はとても驚いた。(p.59)

2-3 ジャンダルマの取引

脱走兵とその家族はジャンダルマの捜索によって追い詰められていたが、その状況を利用して賄賂を受け取るジャンダルマも現れていた。

ジャンダルマと警察官が脱走兵を捕まえると、死ぬほど殴り、拷問をし、時にははじめから殺しにかかった。尽きるのか、終わるのかわからない犬の遠吠えが始まった。誰も家で眠れなかった。皆ただじっとしているだけだった。

この状況を金儲けの場にした男達が現れた。「金をよこせば助けてやろう。」と言っていたのだ。「よこせ、よこせ！もっとよこせ！」1度金を渡したら、奴らの欲望が尽きることはなく、めちゃくちゃにされるだろう。断った時には脅迫が始まった。

「お前らの子供がどこに隠れているのか知っているんだぞ！」

意志とは裏腹に、結局金を出すのだった。数え切れない司令官や高官の役人、警察官長、平のジャンダルマや通信兵はこのようにして金

持ちになった。

毎日新たな略奪と殺人が起きた。これらの全てが、実は警察によって計画されていたことは知られていたが、裁判所へ申請して犯人を密告するためには命を危険に曝すことが必要だった。私達が言えるだろうことはすでに何も残っていなかった。トルコ人は皆私達に好きなことができた。政府は徴兵者を養うために税金を上げ続けた。兵役免除の金額は、25歳を超えた者には40リラ、超えていない者であれば60リラと決められていた。6, 7人の子供を抱えた家族にどうやってこの金額が払えようか！

村の駐在所には戦争前は8人のジャンダルマがいた。今はというと40人だ。2回の奇襲をして村中を引っ掻き回して探し出す警察官の役人たちと軍警察の関係者たちも別だった。(p.59-60)

2-4 トルコ人農民とギリシャ人

1914年以前はマノリの住むクルクジャ村は平和だった。殺人事件のニュースもなく、唯一あった事件も1人の女性を巡って2人の男が村人の前で決闘をしたというものだった。⁷²村のギリシャ人と近隣の農村のトルコ人の関係は友好的で、お互いに助け合って生きていた。⁷³しかしその関係は次第に崩れていったようだった。

人々は絶望にふさがれて山へと逃げていた。そこでトルコ人農民の協力が得られれば助かる可能性があった。ただしその可能性はおおいに低かった。トルコ人農民も私達を嫌うように調教されていた。ミュエッジン⁷⁴とギリシャからの難民は、異教徒は猛毒ヘビと同じで、かくまう者は酷い目に遭うと思込ませるのに利用されていた。もっと前にこのキリスト教徒たちを一掃する必要があった。神の命令はこれだったのだ、と教え込んでいた。

しかし私たちの真の敵はトルコ人脱走兵達だった。本来ならば同じ運命の共有者であるはずの私達を1つにできたはずだった。政府はできるだけ多くのキリスト教徒を殺す条件で彼らを援助していた。そしてもちろん彼らもタバコ1本、1クルシュ、1口分のパンのためにどこにしようと誰であろうと、襲い掛かる準備はできていた。(p.60-61)

ある日の昼頃シェブケットがマノリの家にも息を切らしてやってきた。その時マノリはお

⁷² Sotiriyu, p.15.

⁷³ Sotiriyu, p.17.

⁷⁴ モスクで礼拝の呼びかけを行う人。

らず、母と姉、ヨルギとスタマティが家にいた。シェブケットはトルコ人の農民達がギリシャ人に対抗し始めた経緯を説明した。

彼の静かで小さな村でさえ攻撃の準備ができていた。クレタ島や、マケドニアやイピロス (Epir) から追放された難民と青年トルコのデルヴィーシュと他のムスリム達は「疫病の 1000 倍汚い異教徒の犬共め！」と恨みをぶちまけていた。シェブケットは言った。

「初めは彼らは誰も洗脳することはできなかった。農民達は『いいか、これらを信じるのか？自分の目を信じるのか？ギリシャ人と共に何年も友情の中で俺達は生きてきた。なぜ俺達の中に恨みを挟もうか？』』と saying it. 甘い言葉はヘビを穴から出したが、嘘の言葉も子羊を狼に変えた。人というのは弱い生き物だ。村へ来る者達も僕らの利益はあなた達を排除することだと言っていた。『異教徒がいなくなれば、土地と家は俺達のものになる！』と。これを気に入った農民達は頭が壊れてしまったようだった。[中略]

『何であろうと全部俺達の物だ！』

それでも飽き足りないかのように、村にいる脱走兵ヘジャンダルマ達は情報を急いで飛ばした。『キリスト教徒を一掃すればお前達には指 1 本触れない』と… (p.61–62)

こうしてトルコ人の農民達は武装していった。シェブケットは「異教徒は追い出せ！」という言葉に胸が締め付けられ、自分の中に反乱が広がった。すぐに父のところへ行き全てを説明した。「もし私が友人のマノリと家族に報せたら、神とお役人に対して罪になりますか？」という問いに対して、彼の父は 1 日考えた後で「すぐに知らせに行け。」と答えた。

しかしその時マノリとシェブケットは直接言葉を交わすことはできなかった。そしてシェブケットは兵に取られていった。⁷⁵

2-5 マノリの脱走

マノリはトルコ人農村のアリ・ダユ氏の元で奉公をしている時に仲間のパナギと共に脱走した。マノリの脱走は、辛すぎる労働や飢え、拷問に耐えかねた末の行動というわけではなかったようである。アリ・ダユの元での労働はそれ以前の労働者大隊での労働に比べて辛いものではなく、環境も快適であったと述べられている。⁷⁶なによりもアリ・ダユはマノリのことを実の息子のように思っており、戦争が終わるまで自分のところに留まるよう

⁷⁵ Sotiriyu, p.62.

⁷⁶ Sotiriyu, p.91.

説得している。⁷⁷娘のアドビエもマノリに好意を抱いていた。⁷⁸

マノリは脱走兵がいかに過酷な状況に追い込まれるかを十分知った上で、快適さと安全を保障されている状況から脱走を図ったのだった。そしてマノリ自身脱走することを彼らに打ち明けていた。⁷⁹

真夜中に私達は出発した。夜だけ道を進むこととどの村へも入らないことを決めていた。旅で最も厄介な部分は初めの8日間だった。どこも人でいっぱい、見つからないようにするため大変苦労した。その後砂漠の様に乾燥した地域を通った。どこにも一滴の水も見つけられず、私達の精神までもすでに乾ききっていた。空気中の湿気を吸って夜降りる霜の雫を私たちはなめていた。

「渴きで死んでしまう、もう耐えられない……」とついにパナギが呟いた。

彼の姿は野蛮じみていた。このような時のため、必死に隠しておいた水筒の最後の一滴を彼に飲ませた。幸いにも夜が明け始めた時、空気に湿気の匂いを感じた。

「助かったぞパナギ！」私は喜びで叫んだ。(p.106)

2-6 脱走兵に対する人々の反応

脱走したマノリと仲間のパナギは、危険を避けるために誰にも遭遇しないように注意を払っていた。しかし当然誰にも見つかることなく村まで帰ることは不可能だった。人々は彼らが脱走兵であることは一目で気づくが、その反応は様々であった。ここでは脱走兵のギリシャ人2人に対する人々の反応を中心に見ていきたい。

例えばテッサロニキ⁸⁰難民の羊飼いに遭遇した際は「この辺り一帯を荒らしているクルド人の山賊⁸¹に捕まらないようにしろよ。」と忠告を受けている⁸²。別の羊飼いに遭った際は、「もう少し下の方に行くとイズミル - アフィヨン - アダナを通る鉄道線上に駐在所がある。脱走兵を3人捕まえて絞首刑にしていたぞ。」という忠告を受けた。⁸³彼らのように脱走兵の身を案じる羊飼いいもいれば、捕らえようとする者も当然いた。

クルド人たちを追跡している団体を見た。旅が始まってから初めて昼

⁷⁷ Sotiriyu, p.98.

⁷⁸ Sotiriyu, pp.92-94, 105-106.

⁷⁹ Sotiriyu, p.99, p.105.

⁸⁰ セラニキ、セラニク、テッサロニキとも言われる。

⁸¹ 山賊はトルコ語でエシュキヤー、またはハイドウトと呼ばれた。

⁸² Sotiriyu, p.107.

⁸³ Sotiriyu, p.110.

間に私達は歩いていて、他にどうしようもなかった。一刻も早く、この厄介な地域から遠のくことが必要だった。日が暮れると私達はもう一瞬たりとも休まなかった。山から下りる3人の羊飼いを前方に見つけた。彼らも私達を見て捕まえようと走り出した。私達は武装していた。彼らが何もできないことを信じて近づいてくるのを待った。そしてピストルを取り出して空へ発砲した。1発目の音で彼らは不安になり逃げていった。(p.108)

マノリ達は道中果物を取って食べたりしたが、当然十分ではなかった。そんな条件で二晩歩き続け、ついに粉引き小屋を2人は発見した。小麦粉を少し分けてもらおうとしたが、何度も粉屋の夫婦はドアを施錠して拒否した。ついにマノリが「ドアを開けないと火を放つぞ!」と怒鳴ると、粉屋は怯えながら2人を中へ入れた。そしてマノリは粉屋に言った。

「怖がるな。野蛮人でも山賊でもない、ただの脱走兵だ。俺達は何日も食事を口にしていない。女房にペキシミット（固いビスケット）を焼けて言ってくれ。」

彼女はいやいや出て行った。しかし私達が嘘を言わず、約束を守っているのを見ると安心し、私達を満足させるために何をしようかと迷っていた。

食卓を用意し、肉とイマムバユルド（なすとオリーブオイルのトルコ料理）をご馳走してくれた。さらに2つの袋を用意し、1つにはボレッキを、もう1つにはペキシミットとチーズを詰めてくれた。別れる時は私達は40年来の友のようだった。(p.108－109)

しかしこのような交流は稀なもので、多くの場合、脱走兵は農村の人々に歓迎を受けるはずはなかった。脱走兵は常に狙われていたことは次のエピソードからもうかがえる。

2人がわずか20世帯しかない小さな村のそばを通り過ぎる時、ある老人に出会った。老人は挨拶をしてきて、2人が脱走兵であり村へ戻るところだと言うと自分の家に泊まっていけと言った。その村には警察官がおらず彼は村長だった。食事をごちそうすると言われ、空腹だったマノリは彼の誘いを受けることにした。

老人は私達を客間に通し、しばらく気さくに話していた。しかし、スープを持ってくるという口実で外へ出ると、ドアにすばやく鍵をかけた。

「村長さん！なぜ鍵をかけるのか？便所に行くのだが・・・」

答えは簡単だった。家に私達を閉じ込め、朝が来たらジャンダルマに

引き渡すつもりだったのだ。(p.111)

2人は部屋の窓枠を外して脱走することができた。また、ある時はブドウ園のそばにじっと隠れている時、ブドウ農家の夫婦に見つかり捕らえられそうになった。

農家は非常に体格のいい男だった。「まずいことになる！」と思った。男も私達を見て、激しく怒りながら前進してきた。私は銃を出してその場へ座るように言った。男の妻にも座るように頼んだが言うことを聞かず、私へ罵っていた。このため、一瞬の隙を見て飛び掛り、銃身をこめかみに突きつけてきつい声を出した。

「苦しみたくなければそこへ座れ！座って人間らしく話そう。」

〔中略〕

「名誉も金も奪うつもりはない。ただ駐在所へ行って自分達のことを報告させないために、夕方までここで我々の傍にいてもらう。」

「わかった、面倒はおこさない。」と言ってそれ以上言葉を発さなかった。(p.110)

2人はトルコ人の少女にも遭遇した。彼女は民謡を歌いながらハムル（粉を練ったもの）をこねていた。彼女は2人に気づいた瞬間恐怖で悲鳴を上げた。マノリは自分達は悪者ではなく、旅の途中なのでパンがあれば分けて欲しいと頼んだ。

「すみません、お嬢さん。私達は旅の途中で悪い人間じゃない。私達の旅はまだまだ長い。もしパンが少し残っているなら、良かったら分けてもらえないだろうか。」

「パンは1つもない。今朝羊飼いが持っていった。私も新しく小麦粉をこね始めたばかりよ。」

「ならば少し水をもらえないだろうか。」

「水ならその木の下にある、自分で持って行ってちょうだい。」

(p.113)

この会話では少女が2人に早く立ち去って欲しいと考えていたことがうかがえる。この直後、100メートル進んだか否かのうちに彼らの前に大柄の男が現れた。ライフル銃を突きつけられ2人は何もできず男の指示に従った。

男は私達をテントへ連れて行った。テントの真ん中で2つに別れ、女がいない区画へ入った。男は常に手に銃を持っていたが、人相に悪い

ものは感じさせず落ち着いていた。私達を頭のとっぺんから隅々までじっと見ると優しい声で「どうぞ座ってくれ。」と言った。

私達が座るや否や男は銃を置いて、タバコ入れを取り出しタバコをくれた。私達は混乱していた。

「私に作り話をする必要はない。お前達は脱走兵だろう。ただどこから逃げ出してどこへ行くのかを言えば十分だ。」

アンカラから来てイズミル方面へ行くことを誠意を持って伝えた。

「実際のところ、お前達がどこから来てどこへ行こうと興味はない。私が知りたいのはお前達がどんな人間か、目の前に現れる女達にどう振舞うかだ……。私が見たところお前達は人間らしく振舞っているし、悪い奴ではない。無事に故郷へ着けるといいな！私はお前達が山の斜面を降り始めた時から見ていたんだ。よし！俺達のテントに向かっていぞ、と自分に言った。2人をその場で撃ち倒すことが頭には浮かんだが、どんな人間か試さずに罪を犯したくなかった。

今日は神聖なクルバンバイラムだ。お前達が今日ここへ辿り着いた運命も神によるものだろう。さあ食事をしよう。」(p.113－114)

男は食卓を用意して2人にご馳走した。2人も遠慮せずにそれを食べた。男の妻は2人のために蜂蜜入りのボレッキを作り出発の際に持たせてくれた。

見送りのために彼も私たちと一緒にしばらく歩き、ちょうど私たちが別れようとした時に、彼は自分が脱走兵の追跡役人の監督であることを言った。クルバンバイラムを妻と一緒に過ごすために2日間だけここへ来たのだ。私たちの目は興奮と恩で涙がいっぱいになった。
(p.114)

その後ギリシャ系の娘たちが民謡を歌っているところに遭遇した。彼女たちははじめ悲鳴を上げて逃げたが、自分達も同じキリスト教徒の脱走兵だと言うと戻ってきた。彼女達は様々な村からタバコを収穫するために来た労働者であった。「寝てはいけなないので眠気を抑えるために民謡を歌っていた。」とそのうちの1人が説明した。2人は一休みするために彼女達と一緒に座った。新鮮なイチジクと白いパン、オリーブなどを彼女達に分けてもらい2人は再び村へ向かった。⁸⁴こうしてマノリは村に辿りつくことができ、1度目の脱走は成功した。

⁸⁴ Sotiriyu, pp.114-115.

おわりに

以上、労働者大隊（Amele Taburu）と脱走兵を中心に当時のアナトリアのギリシャ人の体験を見てきた。本論では労働者大隊の概説をあげることができなかったが、『マノリの回想録』からはギリシャ人達が辛く厳しい条件の下にいたことが分かる。労働者大隊でのギリシャ人が体験した飢えや拷問の様子が詳しく描かれていた。また、脱走兵とその家族が厳しい追跡から命がけで逃げていた様子もうかがうことができる。

労働者大隊に限らず、ギリシャ人が酷い体験をするシーンは全編を通して割合が高い。4章でも捕虜となったギリシャ人に対するトルコ人の仕打ちは非常にひどいものであり、詳しく説明されている。それに対して、3章ではギリシャ人はトルコ人を圧迫する側になっているが、この章でトルコ人に拷問をするシーンはほとんど見受けられない。ギリシャ人の作家の作品だけに、こういったギリシャ人寄りな部分があるのは当然のことかもしれない。

しかし、『マノリの回想録』から見られる描写は、決して「ギリシャ人がどれだけ辛い目にあったか」だけではない。それはマノリが出あったトルコ人達のキャラクターからも見受けられるだろう。友人のシェブケットを始め、チフスの蔓延から命を救った医師、奉公先の農村で出会ったアリ・ダユ、娘のアドビエ、など作品中トルコ人はただ残虐行為をギリシャ人にしただけの存在としては決して描かれていない。

トルコ人に命を救われる感動的なエピソードや、トルコ人の娘と恋愛関係になるシーンなどは小説ゆえの創作的シーンともとれるが、そこには著者ソティリュ自身のトルコ人に対する友好的感情があるのではないだろうか。物語の終わりに、マノリは本来同じ土地で育った仲間同士を殺し合わせた原因となったものに、憎しみや怒りと取れる感情をぶつけている。物語りを締めくくるこのマノリの言葉にも、ソティリュのトルコ人とギリシャ人を引き裂いた戦争に対する想いが現れていると取れるだろう。

著者自身が語るように⁸⁵、この作品は失われつつある時代を再現するという目的で執筆された。『マノリの回想録』には当時のギリシャ人が何を体験したかが詳しく描かれており、小説として脚色されている感是否めないものの、その脚色にもアナトリアのギリシャ系住民であった著者の想いが反映されていると考えられ、1つの貴重な資料として見れるだろう。

ただし今回資料として用いた『マノリの回想録』はトルコ語翻訳版であり、トルコ語に翻訳された際、またトルコで出版するという目的において、原作が脚色されている可能性も十分考えられる。もともと翻訳という作業は元の言語と訳される方の言語の間に差異が生じるものである。各言語が持つ単語のニュアンスや独特の言い回しなどを翻訳で完全に伝えきことは難しい。さらに文学作品の場合、翻訳者の文学的センスも大きく影響するだろう。『マノリの回想録』はギリシャ語の原作がフランス語に翻訳され、それがトルコ語に翻訳されたものである。ギリシャ語からフランス語、そしてトルコ語へと訳される際に

⁸⁵ Sotiriyu, p.5.

どれだけ文章とその内容に変化が生じたのかを考慮する必要があり、ギリシャ語の原作にも目を通すことが今後の課題となるだろう。

参考文献一覧

日本語文献

新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001年。

桜井万里子編『ギリシア史』(新版世界各国史 17)、山川出版社、2005年。

ジョン・フリーリ著、鈴木董監修、長縄忠訳『イスタンブール: 三つの顔をもつ帝都』、NTT出版、2005年。

リチャード・クロッグ、高久暁訳『ギリシャの歴史』(ケンブリッジ版世界各国史)、創土社、2004年。

外国語文献

Dido Sotiriyu, *Benden Selam Söyle Anadolu'ya*, Atilla Tokath(tr.), Istanbul: Alan Yayıncılık, 1989(7th ver.), first published in 1970.

Dimitri Gondicas & Charles Issazi (eds.), *Ottoman Greeks in the Age of Nationalism*, The Darwin Press, 1999.

Küçük Asya Araştırmaları Merkezi, *Göç*, Herkül Millas(ed.), Damla Demiröz(tr.), Istanbul: İletişim Yayınları, 2004(4th ver.), first published in 2001.

Mehmet Ali Gökaçtı, *Nüfus Mübadelesi: Kayıp Bir Kuşağın Hikayesi*, Istanbul: İletişim Yayınları, 2004(3rd ver.), first published in 2003.

Renee Hirschon(ed.), *Ege'yi Geçerken 1923 Türk-Yunan Zorunlu Nüfus Mübadelesi*, Müfide Pekin&Ertuğ Altınay(tr.), Istanbul: İstanbul Bilgi Üniversitesi Yayınları, 2005.

Peter Mackridge, "Yunan Romanında Küçük Asya Miti" in Hirschon, R., ed., *op. cit.*, p347-364.

インターネット

KızılBayrak.(2000.10.21).sayı39.arsiv,anasayfa

(http://kizilbayrak.org/2000/39/sayfa_28.html). 2006. 1. 9 取得.

Sabah.(2004.9.25).

(<http://www.sabah.com.tr/2004/09/25/dun106.html>). 2006. 1. 11 取得.

Şirince guide

(<http://www.sirinceguide.com/tr/default.asp?cat=transport>). 2006. 1. 9 取得.

Türkiye Taşkömürü Kurumu.

(<http://www.taskomuru.gov.tr/havzatarihi.htm>). 2006. 1. 9 取得.